

心の栄養剤No184 『かさじぞう』 二人はすでに幸せだったのです

僕が最初に、「絵本の絵はこうじゃなきゃいけない」と思ったのが『かさじぞう』（文・瀬田貞二、画・赤羽末吉）です。

『かさじぞう』に出てくるおじいさんは、「今日は笠を五つこしらえた」と自慢します。そして、「町へ行って笠を売り、正月の餅買ってくる。今年こそはいい年とるべな」と出かけます。

おばあさんは、「はいはい。火いたいて待ってるから」とおじいさんを送り出します。どうやらあまり期待していない様子です（笑）。

おじいさんは町にやって来ます。町は賑わっていますが、おじいさんは見向きもされません。そのことを表現するために、町の人たちの絵はみな背中です。

おじいさんのところにやって来るのは黒い犬だけ。なぜ黒犬か？白犬だと雪の中なので透明になっちゃうんです（笑）。

帰りは吹雪です。おじいさんはおじぞうさまに出会います。

おじぞうさまは6人、でも笠は五つです。絵を見ると、笠を被っていないのは右から2番目のおじぞうさまです。

これは、左から順番におじぞうさまに笠を被せていき、途中で「あ、足りない」と気づいたということなんですね。

こんな時、人は最後の帳尻を合わせようとするんです。だから4番目を飛ばして、5番目のおじぞうさまに笠を被せたわけです。実に人間臭い絵です。

でも、**どうしても気が引けたおじいさんは、自分の笠を取って被せます。**とてもほのぼのとしたユーモアのある場面です。

そして、おじいさんは家に帰ります。事情を聞いたおばあさんは怒りもせず、おじいさん褒めるんですね。**「おじぞうさまにあげてよかったな。そならば、漬物ででも年をとるべ」**と。そして二人はそのまま寝るんです。

その夜中、「よういさ、よういさ、よういさな」と、どこからか声が聞こえてくる。その声がだんだん近づいてきます。

正月用のお餅や魚や小判がどっさり詰まった荷物を、笠のお礼にと、おじぞうさまたちが持って来たんですね。

「それから二人は幸せになった」と絵本に書かれていますが、実は「それから」幸せになったわけじゃないんです。**すでにおじいさんとおばあさんは幸せだったんです。**

もちろん暮らしは貧乏です。でも「笠を五つもこしらえた」と自慢できたり、一生懸命作った笠が売れなくても怒られず、それをおじぞうさまにプレゼントするくらいの「おしゃれ心」を持っていたわけです。

そういうちょっとしたユーモアを楽しめる心や、少しでも前向きになれる面白いことを見つける心が幸せに生きるということだと思います。**そんなふう**に暮らしていた二人は、**すでに十分幸せだったのだろうなと思うのです。**

だから、大金をもらった時も、二人はそれほど大喜びしているようには描かれていません。そんなところにも赤羽さんの偉大さを感じて、私はとても感動しました。見事な一冊です。赤羽末吉さん、50歳のときのデビュー作です。

日本講演新聞 社説より

冬になり～雪が積もったりすると、決まって・・・

「おじいさんが、お地蔵さんの頭の雪を払って、笠を被せる」絵本のシーンを思い出しホッコリします。

コロナ禍のなか、夫婦や家族の仲が良くなったり～感謝の気持ちが強くなったというアンケート結果が報道されていて、コロナ禍もすべて悪い事ばかりじゃなかったと思います～いやそう思いたいです！

家族をはじめ身近な存在の人への感謝の気持ちを持って過ごす習慣を身に付けて心豊かに、この一年を締めくくり～明るい希望に満ちた新しい年を迎える準備としたいものです。

今年も一年間「いたわり」「心の栄養剤」にお付き合い頂きありがとうございました。

